

M-GTA 研究会 Newsletter no.1

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：青木信雄、岡田加奈子、小倉啓子、小嶋章吾、斉藤清二、佐川佳南枝、柴田弘子、林葉子、水戸美津子、木下康仁

第23回 研究会の報告

【日時】 2003 年 11 月 29 日(土) 13:00~18:00

【場所】 立教大学(池袋キャンパス)10号館 x308 教室

【参加者（敬称略）】

青木信雄（龍谷大学）、佐川佳南枝（西川病院）、古瀬みどり（山形大学）、林葉子（お茶の水女子大学）、小嶋章吾（大正大学）水戸美津子（山梨県立看護大学）、山口正之（千葉大付属小学校）、筒口由美子（富山医科薬科大学）、林裕栄（埼玉県立短大）、矢吹道子（虎ノ門病院）、鈴木直樹（東松山市立新宿小・東京学芸大学）、浅川康吉（群馬大学）、小倉啓子（青梅慶友病院）、塩塚優子（青梅慶友病院）、佐瀬恵理子（東京大学）、大河内章子（日本女子大学）、留目宏美（茨城大学）、中村朋子（茨城大学）、三徳和子（川崎医療福祉大学）、荒井昭子（日本福祉大学）、金井幸子（新潟県立看護大学）、阿部正子（新潟県立看護大学）、笹野京子（新潟県立看護大学）、千葉京子（日赤武蔵野短大）、岡田加奈子（千葉大学）、酒井都仁子（長南町立西小学校）、山崎登志子（宮城大学）、川波公香（大阪大学）、木下康仁（立教大学）の計 29 名

【世話人会報告】

- ・ 10 月 24 日に新潟県上越市で開催した第三回公開研究会は合計で約 70 名の参加があり、アンケート結果をみると非常に満足された内容であった。今回初めて行なったペアセッションの形式は効果的であった。
- ・ 会としての反省点としては、役割分担の体制の明確化、開催運営の責任者を決めておくこと、領収書の内訳（参加費と資料代）を明示することが指摘された。
- ・ 会計報告

収入：参加費 50 名×3,000 円=150,000 円（会員参加者は無料）

支出：会場準備者弁当代 5,460 円

飲み物代 1,333 円

医師会への謝礼品 6,321 円

コピー代 4,800 円

計 17,914 円

差引 132,086 円 →研究会の口座に入金

備考：水戸先生のご尽力で、上越市医師会館を無償で使用させてもらった。

【報告】

(第 23 回－第 1 報告)

在宅要介護高齢者を介護する配偶者の介護役割受け入れプロセス

－2 つの M-G T A 分析結果同士の比較方法について－

お茶の水女子大学人間文化研究科 林 葉子

研究の目的：配偶である介護者が介護役割をどのように取得していくかというプロセスにつき妻と夫を比較しつつ、実証的に解明することである。配偶者を介護する者の介護役割に対する解釈や意味付与のプロセスをジェンダーの視点から検討すること。

- ・ 夫と妻を比較検討するために、同時期にインタビュー調査をした妻について同様の分析テーマで、追加分析を試みた。

悩み点：夫と妻を比較するという目的で、妻の概念を生成したが、第 2 論文としてなりたつのか。

- ・ 比較する目的で分析した「有配偶女性介護者（妻）による介護役割受け入れのプロセス」の概念生成は男性介護者の分析と同様の次元で行われるべきかどうか？（比較するには、次元が同じでなければならないのではないかという疑問から）
- ・ 次元を統一することと、カテゴリーを統一することは、同じ意味か？
- ・ 個別に分析後、比較検討ができるのか？個別に分析した場合、両方の分析結果どうしの比較の視点の設定をどうするか？
- ・ 比較する目的とは関係なく、分析した場合、比較することができるのか。
- ・ ‘比較する目的とは関係なく’とはいっても、後で分析した妻の分析結果が夫のものに引きずられてはいないか。

M-GTA 研究会でのアドバイス：妻の分析結果が、夫の結果を意識しすぎている。そのため、中途半端に対応した結果になっている。大切なことは、比較することを念頭におかないで、妻のほうも個別に独立して分析する。そうすることによって、GTA の結果の信頼性が担保されるし、結果間の比較という意味では、オリジナルなものが出てくるのではないか。

今後の予定：次回研究会までに、妻に関する分析を行い、改めて、比較してみる。分析に際しては、今回のものより、概念生成をもう少し細かく考える。また、プロセスがわかるような表現にする。

(第 23 回－第 2 報告)

医療依存度の高い利用者に対する訪問看護師の支援に関する研究

－在宅療養の筋道形成プロセス－

山形大学医学部看護学科 古瀬みどり

報告内容の要約

介護保険の実施と在院日数の短縮化に伴い、医療依存度の高い患者が退院となり在宅療養するケースが増加の一途にある。訪問看護は、そのような利用者および家族に係り、在宅療養継続に向けてのサービスを提供している。そこで、医療依存度の高い利用者が在宅療養を開始する初期の段階に焦点を当て、在宅療養に適応するまでのプロセスと訪問看護師の支援の相互関係を訪問看護師の視点から明らかにすることを研究の目的としたい。

プレテストとして 4 名の訪問看護師にインタビューした結果、医療依存度の高い療養者および家族に対する支援として“筋道をつくる”という概念が導かれ、“筋道形成”について分析した概念までを報告した。

現在困っている点として、その後のインタビューの際“筋道形成”について訪問看護師に聞いたところ、サービス提供者側が筋道をつくってゆくことは介護保険の理念に反するのではないかという意見があり、テーマが揺らいだ。研究として果たして成立するだろうか疑問に思い参加者の皆さんの意見をお聞きしたいと思った。

質疑についてのコメント

- ・ 何を明らかにしたいか不明確
- ・ 概念名がデータとも定義ともとれるもので不適切
- ・ 対象者が訪問看護師であるのに、概念の主語が他者になっているものがある
- ・ インフォームドコンセントのプロセスに似ている

参加者の方から上記のご指摘があった。自分でも何をしているのかわからなくなっている点があることを自覚していたので、ひとつひとつの意見に対しその通りと思いながら聞いていた。木下先生から支援や介護力という言葉を抜く、訪問看護師の支援については次の課題とし医療依存度の高い利用者の在宅療養安定化のプロセスとしてはどうか、対象者は訪問看護師のままでインタビュー時の聞き方を変えてみるとのアドバイスをいただいた。また“筋道”については好ましくないという意見があった。訪問看護の成果をぜひともテーマに含めたいと考えていたが、無理に訪問看護の支援を含めずとも医療依存の高い利用者の療養生活には訪問看護の係りが自ずと入ってくること気づかされ幾分気持ちがすっきりした。インタビュー調査が予定の半分も進まないまま中断していた状態なので、アドバイスをもとに調査をすすめその後の経過について次回報告したいと考えている。

(第 23 回－司会者から)

第 3 回公開研究会を契機に定例の研究会への参加を希望する新しい参加者の顔ぶれが目

立ったことは嬉しいことです。そのためいつもとちがって自己紹介のセッションを設けてみましたが、メンバーの関心や研究計画等を聞くことができ、相互の励みになったのではないのでしょうか。今年度からメンバーシップを明確にしていることから、当面はオブザーバー参加ということになりますが、継続して研究会メンバーとして定着され、量の拡大が研究会の質の向上につながることを期待されます。

お二人からの報告も、それぞれ初めてではなかったこともあり、深みのあるディスカッションができたのではないかと思います。同時に新しい参加者にとっては、M-GTA の基本的な理解を深めるという側面も重要でしょうから、今年度から隔月で試みている M-GTA 勉強会の、研究会とは異なる役割も大きくなっていくのではと感じました。

(小嶋章吾)

【次回の研究会】

日時 2004 年 1 月 24 日(土)13:00～18:00

場所 立教大学(池袋キャンパス)10 号館 x207 教室

ご予約ください。詳細はおって事務局より連絡します。なお、次々回は 3 月 6 日(土)の予定です。

【その他のインフォメーション：会員からの近況報告など】

- ・会員への参考情報やご自身の近況などをお寄せください。

【編集後記】

・今回から参加できない会員にも研究会の様子を知ってもらうために簡単なニューズレターを出すことになりました。研究会の記録にもなります。まだ殺風景な形ですので、これからレイアウトなども工夫したいと思います。お手伝い、歓迎。